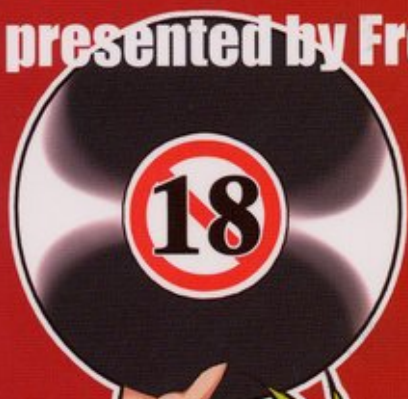
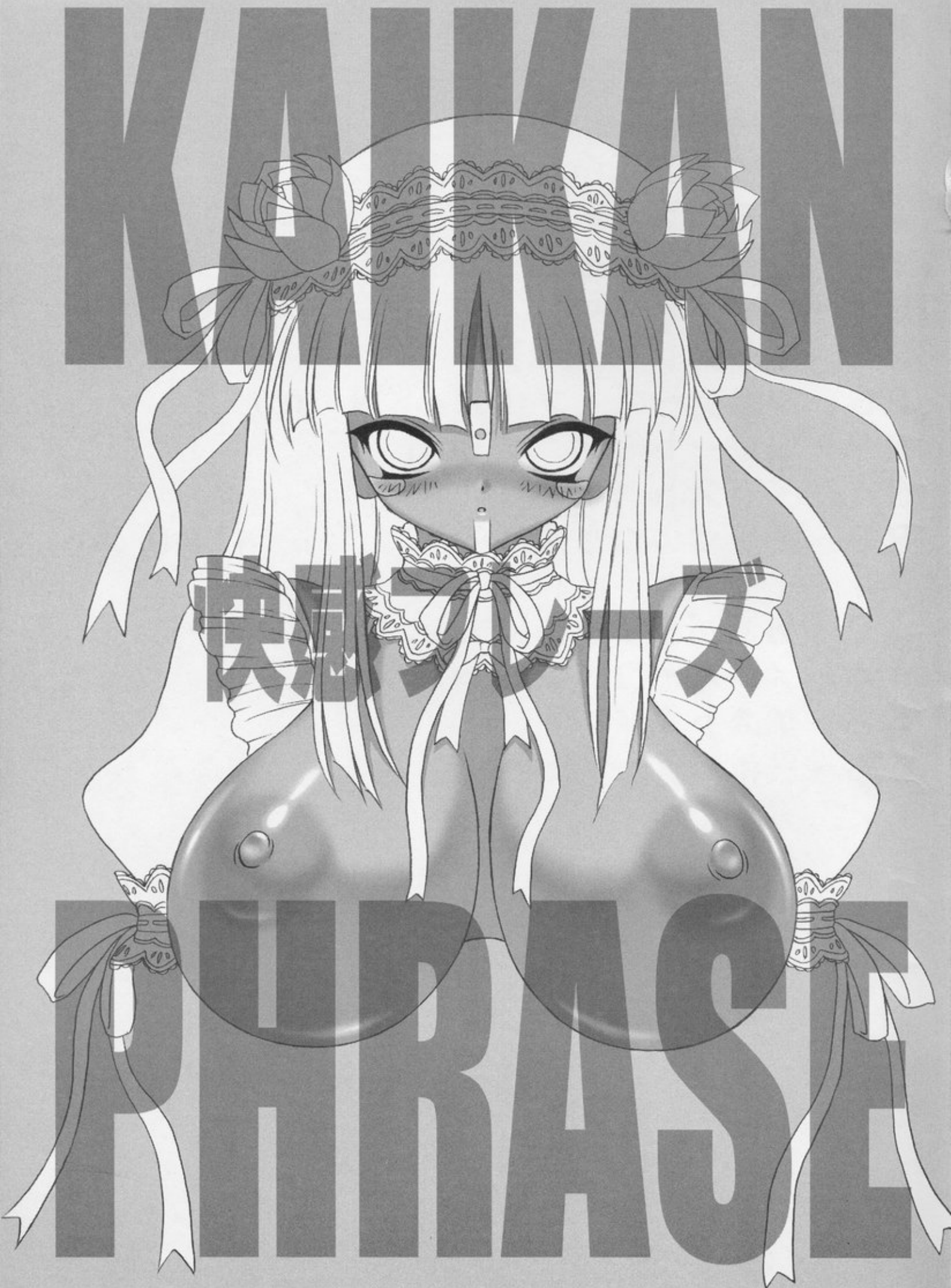


KAIKAN 快感フレーズ PHRASE

for beatmania IIDX fans
adults only
presented by Freaks

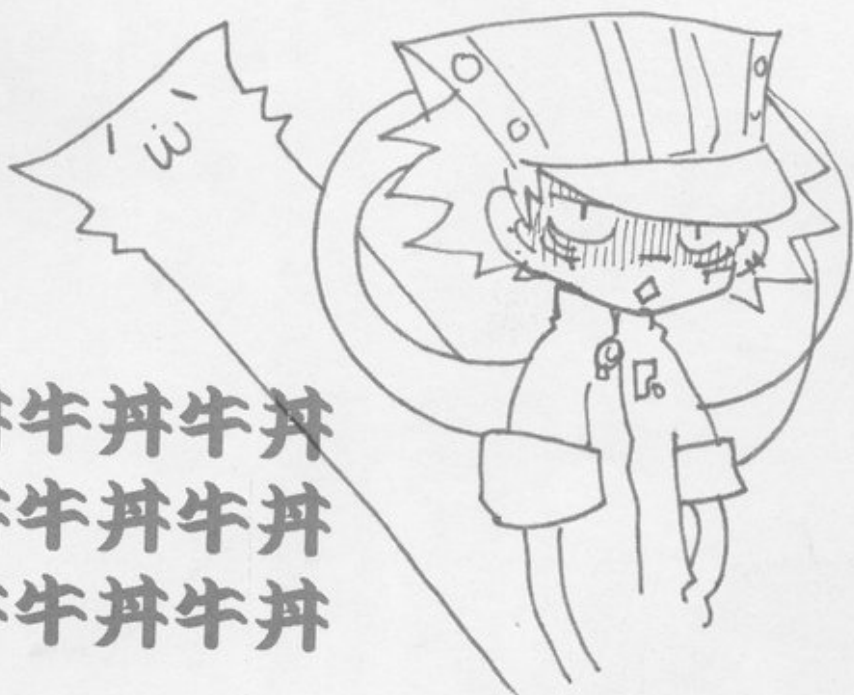




もくじ

- 05～快感レッスン オノメシン
15～イラスト 七麻皐月
16～イラスト オノメシン
17～ひっとちゃん SUMY
21～イラスト 夕月
22～イラスト オノメシン
23～シスターズ・プリティ 猫 (みけ)
33～フリートーク 猫 (みけ)
34～イラスト オノメシン
35～勝負はいつもくだらない 0y2 挿し絵猫 (みけ)
41～イラスト 猫 (みけ)
42～あとがきふゆかひまんが オノメシン
44～メンバーコメント
45～ゲストコメント
46～奥付

牛丼牛丼牛丼牛丼
牛丼牛丼牛丼牛丼
牛丼牛丼牛丼牛丼





リリース！お前も
もう17歳だな

レティのたしなみを
覚えねばならん年頃だ

というわけで

助手2号

助手1号

今日はお前に
夜のいとなみの
レックスンだ！

お兄様
これは……？

あ……

ひん……

それでは
レックスン開始！

快感レックスン

オノメシン

ロー
ピキヤ









この分なら
下もいけそう
ですな

あっ…

ちゅん
ちゅん



さすがセム様の
妹君ですね

才能を
感じます

ハア

ハア

ググ



ちゅん
ちゅん

ひゅん
ひゅん



ではゆくぞ
リリース!

ハア

ハア

…!

…!

ちゅん…

セム



セム様を
受け入れる準備を…

あ
ん…

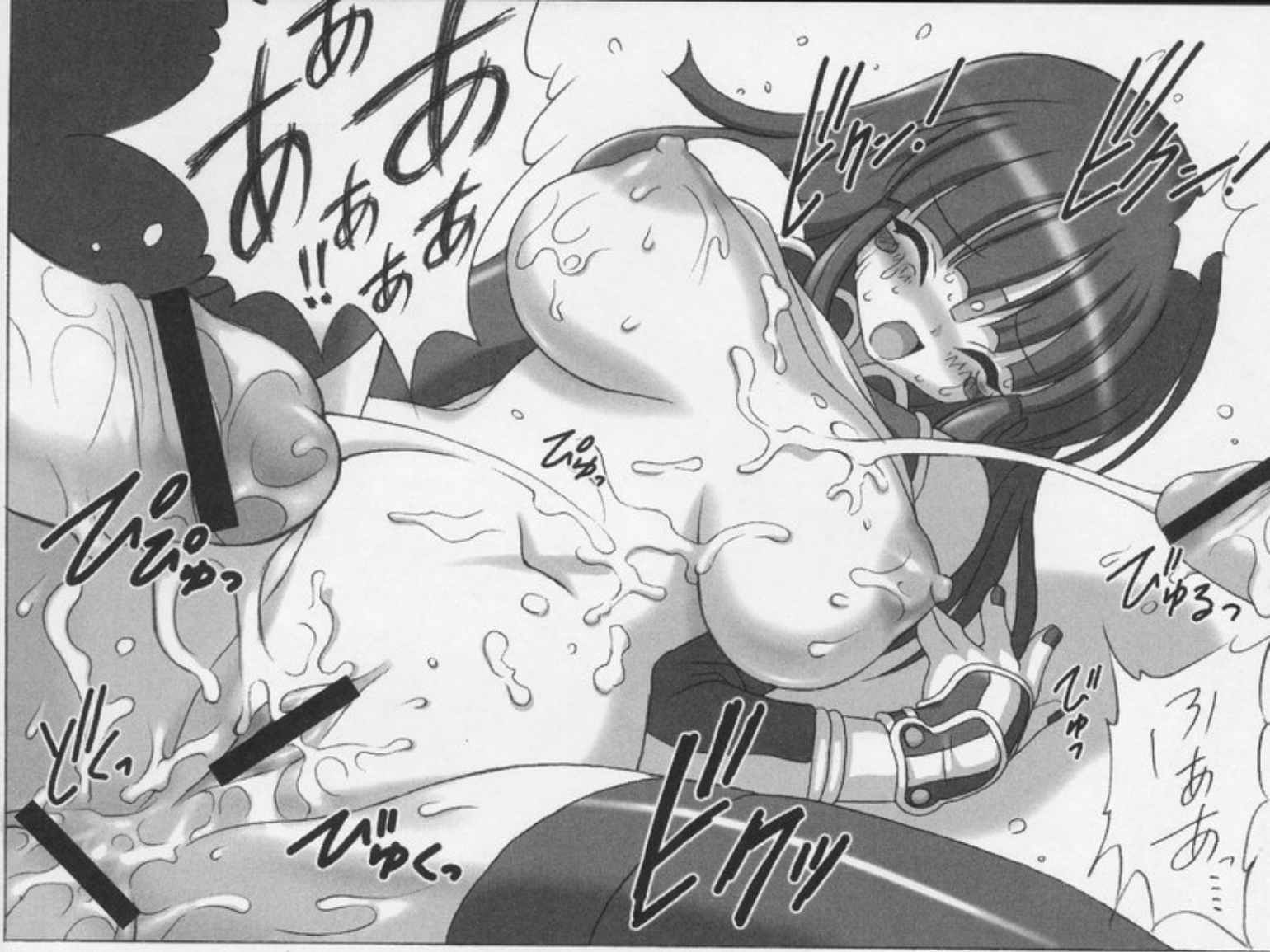
ちゅん
ちゅん

ひゅん
ひゅん

ちゅん
ちゅん









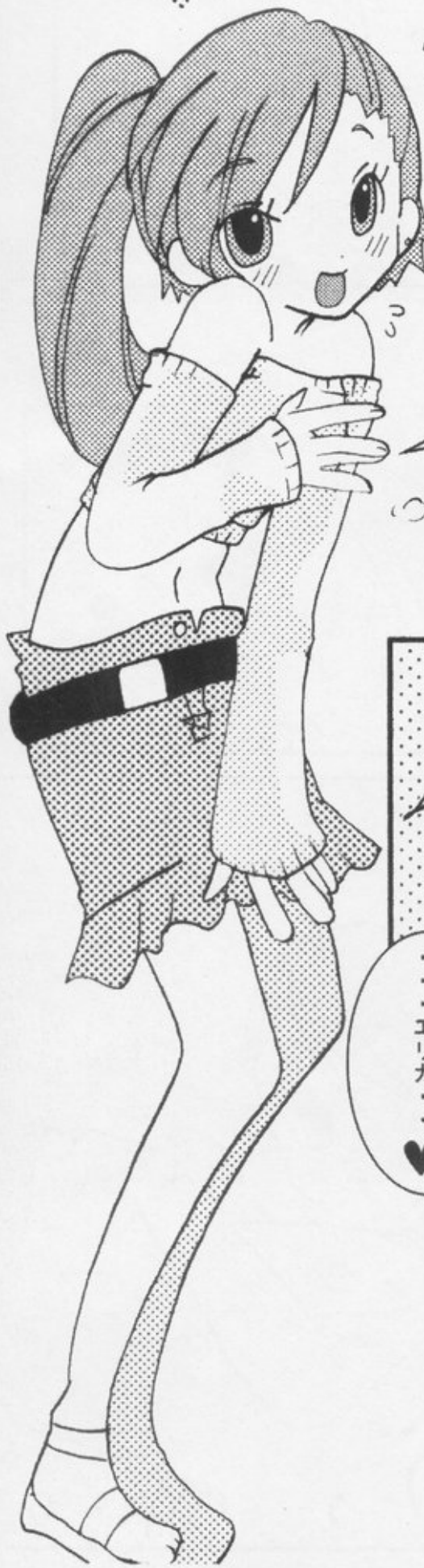
Celica



unknown

wait for
8th style!





士朗っ！

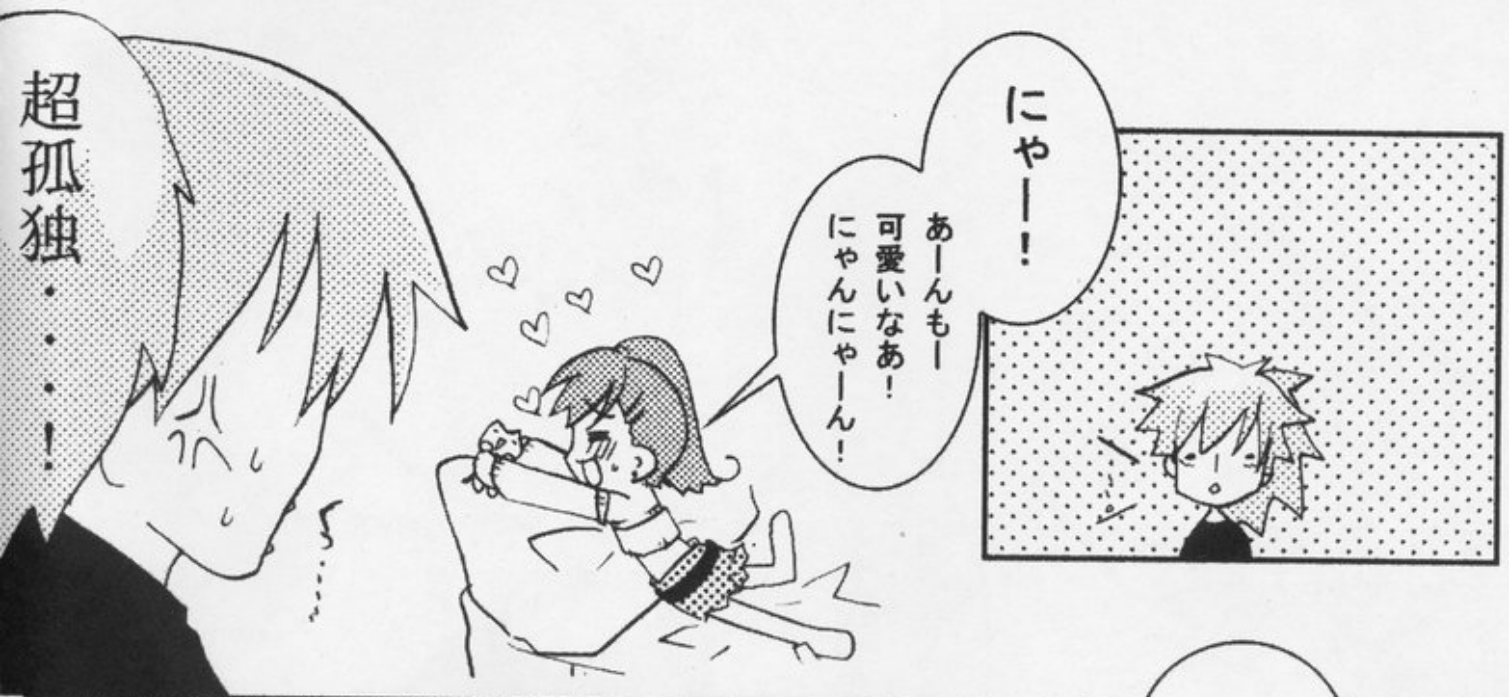


あのね、今日
士朗の家に、にゃんこ
見に行っても良い？

・・・ああ。

・・・エリカ・・・
♡

しとちゃん
sumy



超孤独……!!

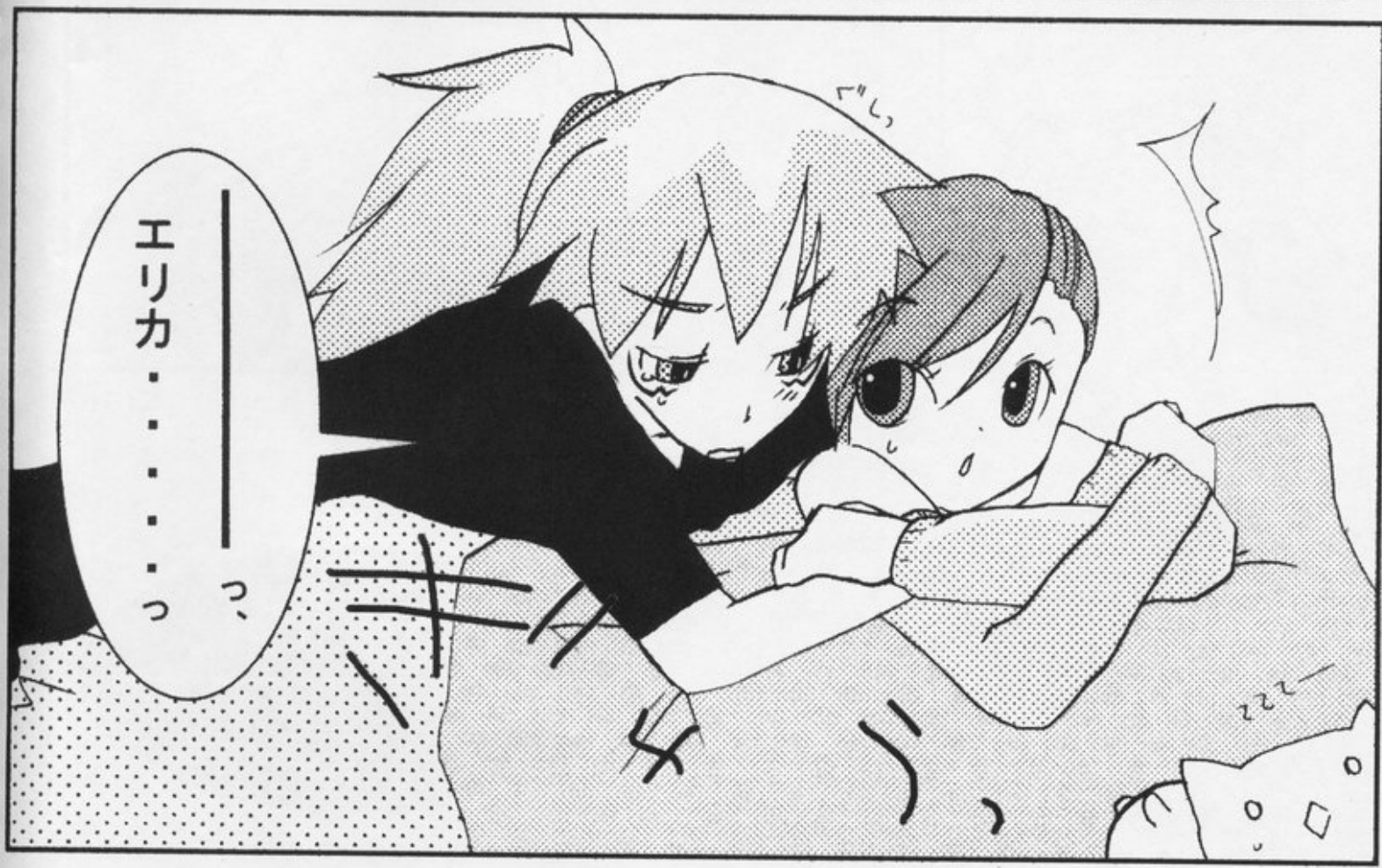
にゃー!!

あーんもー
可愛いなあ!
にゃんにゃーん!!



ん♡

ぷちっ



エリカ……っ

ぐしっ



やっ・・・
ちよつと待ッ、

あ、あ
やだあ・・・っ

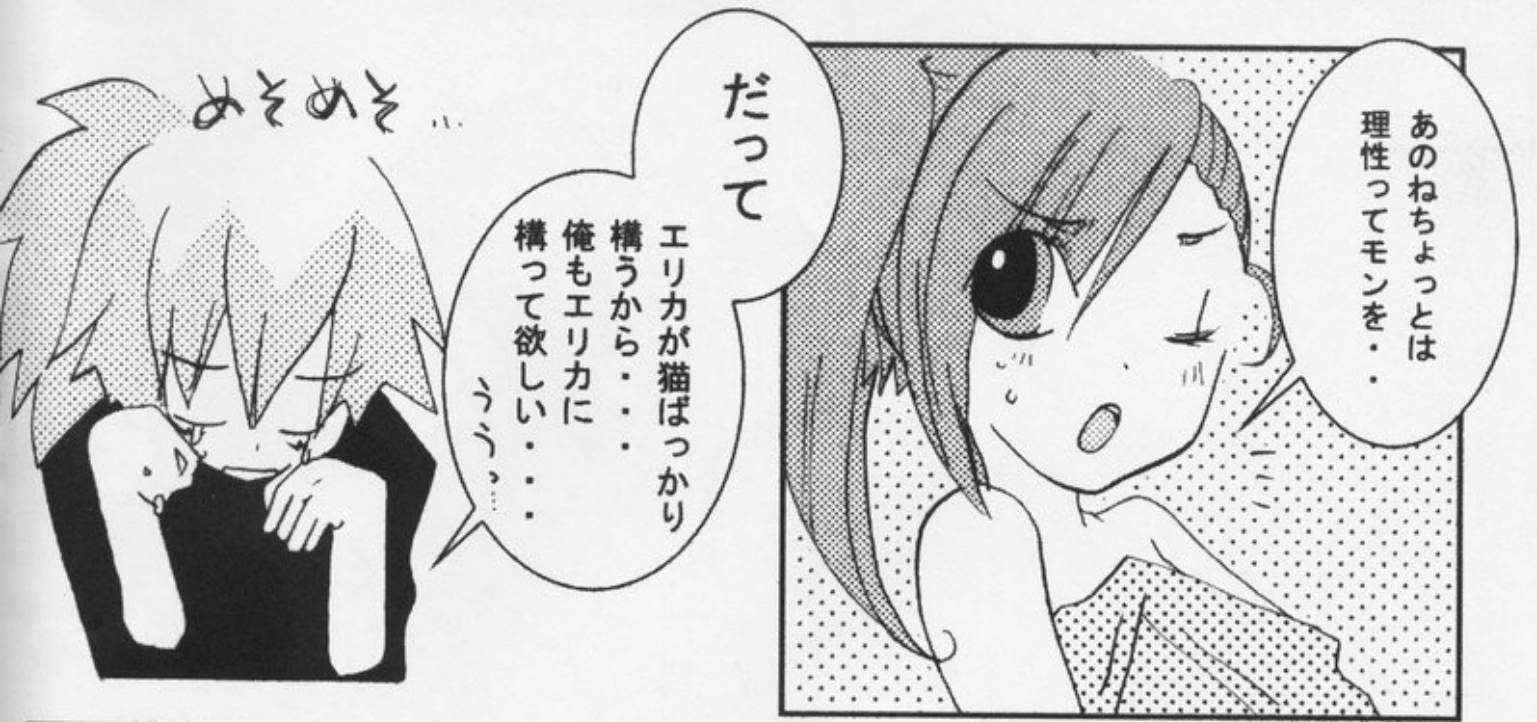


へっ?
ええっ
ちよつ・・・

ちよつとっ・・・っ



士朗っ・・・——
!!



だって
エリカが猫ばかり
構うから・・・
俺もエリカに
構って欲しい・・・
フシ...

人はコレを
「流される」という。



中途半端に完。



Erika



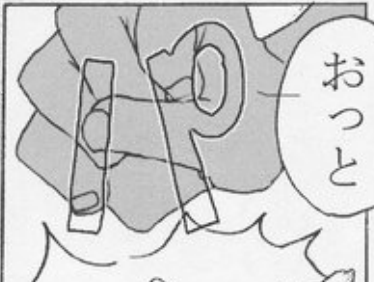
Nyah



いい加減にしないと
人を呼ぶわよっ
大体っ！何をする
つもりなのっ！



中々威勢が
良いじゃねえか



おっと



触らない
でよっ

何をするつもり
もなにも・・・



い
い
い

こんな所に連れて
来たらする事は
決まってるじゃん



ちゅゆ

ほらよっ
まずはたーっぷりと
ご奉仕して貰おう
かな♪

なっ！



か
ゆ

出来る訳が
無いじゃ無い！

そっ
そんな事っ





ふぐっ!
むぐうっ

ううっおっ
でっ射精るっ

ブルッ



ふあううっ

ぴちや
ぴちや

ぴちや
ぴちや



んむう

ちちぶっ
ちちぶっ

ちちぶっ
ちちぶっ



ドクッ ドクッ

ふああ

ヒッ
ヒッ

ハッ
ハッ



ふあ?

あつ
いやあ

脱
つ

はっ
はっ



ぐいっ
ぐいっ

じゃあ
そろそろ
本番行くか

大分薬が
聞いてきたな

トッ
トッ



ほらよっ
たっぷり飲めよな

ビクビクッ

エリカア

ふあ...

ズッ
ズッ

あふうっ



安心しろよ
寂しくないように
お仲間も居るからさ

え？お仲間？

パチン



ほらあつちに
居るぜ？

えっ！

嘘でしょ...



ああだめっ
入らないようっ
痛いっ！

ズッ
ズッ



きやあつ！
いやっやめてっ！
やだああつ！

ビクッ

早速お友達に仲間
入りさせてやるよ！



ははっこいつ嫌がってた癖に
ずぶずぶ入っていくぜ。
とんだ淫乱女だなっ(笑)

あっあっふあっ
いやああっ
そんなにつ

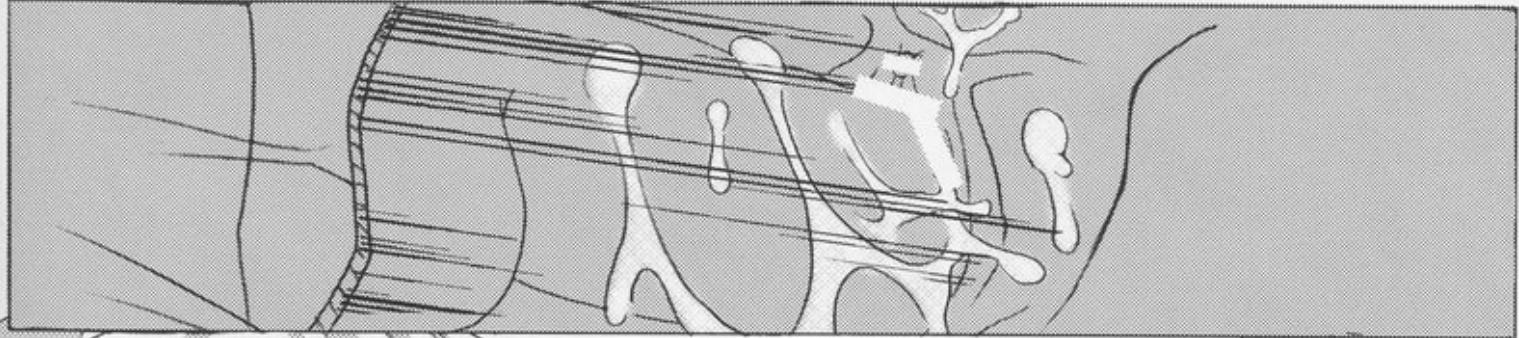
激しく
したらっ
壊れちやうっ

びしょっ

ずぶっ

ずぶっ

びしょっ



さあて
こっちの女は
そろそろ後ろの味を
試してみるかな♪

むぐっふむう・
あっ・・ほこはっ
触っちやらめ
っ・・はぐっ

びしょっ

ずぶっ

ずぶっ

ずぶっ



こいつ
もうよがって
やがるぜ!
ほらっもつとして
欲しいのかよっ

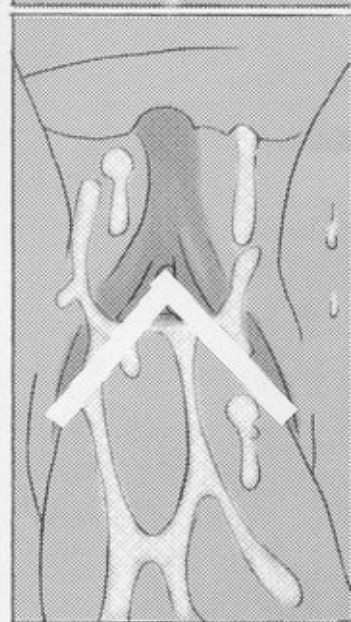
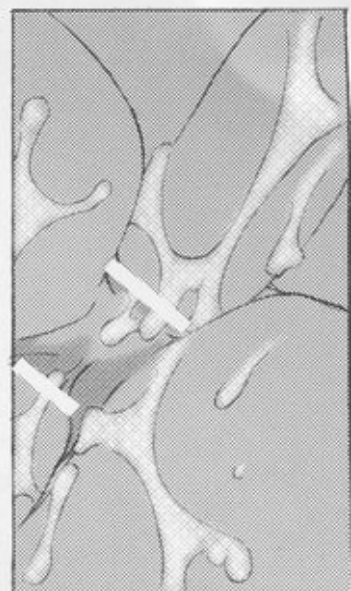
あつあつんっ
そんな事なっ
ふああつ!はうんっ



はははっ!おまんこと尻に
ちんちん突っ込まれて
喜んでるぜっこっちはよっ

二人ともザーメンで
ぐちよぐちよにしてやるよっ
まんこぶっ壊れるまで
やるからなっははははっ

あうっああっ
だめえっ!



フリーワーク 5しぎもの(7イ)

ほうほうですー。猫(みけ)です。

SEXYMUSICから 2冊目の音ゲー本

なりますー♪ ドキドキ1071107ー 〽️〽️〽️

嬉しいです。今回はかなり無茶なスケジュール

だったのですけれどもがんばってました(汗)

キツかったですけれどもやっぱり本を出す

作業というのは楽しいですね。

まあこんな事書いてる現在トーン終って

無いんですけど(死)あうう(泣)

今回はニテラオ=11本となりました。

音ゲー自体キャラが多いし何よりポップソ

ンはキャラ数が多いすぎて…(汗)

ほぼ全てのキャラが大好きで選べない

のであきらめました(泣)

ホエとかリゼとかミウとかいっしょ描きた

かったんですけども…あうくやしい(笑)

この本が出る頃にはもう8冊が出てますね。

どんな曲が増えてるのか

とても楽しみです。

11冊11画面とかも…(邪)

新しいキャラ画面とか見たら

又、CGとか描きたくなるなあー

早くHP更新しないと。あわち(汗)

IDCGとかもっと描きたいです(7イ)

IDマンがは今回いっしょ描いたんで(笑)

しばらくはお腹いっぱいかもー。

ニしてうんとがんばりましたので。

まあオメシこの方が100万倍は上手いので

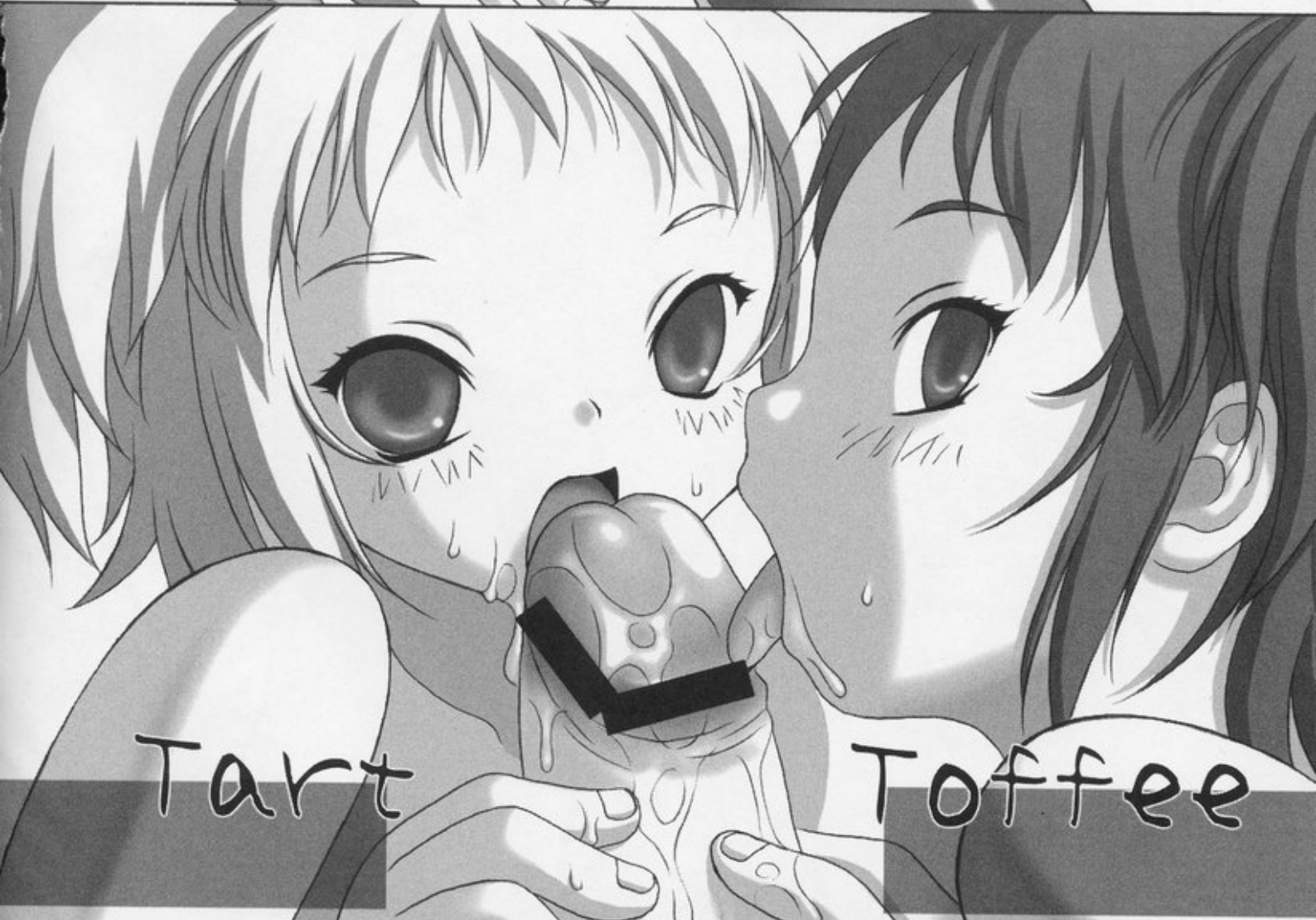
そのマニカを読んでもらって下さい(笑)

この自分の？ ホキキス止めとかして(れ

ると…(死) じゃじゃー



BT
猫(みけ)





セリカはそれに気づいた瞬間に動いた。

つぶれるように寝転んでいるエリカの上に覆いかぶさった。

「エリカ、覚悟」

そう言っ、倒れこんでいるエリカに抱きつく。抱きついてそのまま後ろに体重をかけ、エリカを無理やり起こした。

「きゃ、ちよっと」

無理やり起こした次の瞬間には、両手でエリカの胸を思いっきりつかんでいた。

やさしく揉んだ。

エリカは声を押し殺すのがやっとだった。体中の力が抜けて、起こしている上半身がその場に崩れそうになった。慌てて両手を伸ばして床につける。力が入らないなりに何とかな体をささえることができた。

それが逆にいけなかった。

胸を支えに起きている上半身は、防御するものが何も無い。

シャツの上からでも分かるくらいに大きく硬くなっているものを転がすように、手のひらをゆっくりと動かしていく。

「あ、だめよ、何で、こういう事に、ああん」

セリカに抗議しようと思いつくが、言葉が途中で快楽に負ける。声が甘い音にしかならない。

セリカは、赤く染まってきたエリカの耳に唇を近づけた。

「あら、そんなこと、本当に思ってるの？」

そう言いながら、左手をエリカのおなかの辺りに持っていき、そして、シャツの中に手を入れると、捲り上げながら直にエリカの胸を触る。

「ひゃん」

くすぐられたせいで感度が良くなっているのだろう。びっくりするほど、素直で激しい反応をエリカは返してくる。

セリカは調子に乗っていた。

左手の人差し指と中指の間にエリカの敏感な胸の先端を挟むと、軽くこすりつけながら胸を揉む。

同時に耳たぶを唇で噛み、舌で舐める。

そして、右手はするりするりと降りて、ショートパンツのジッパーに手を伸ばす。

「だめえ」

声に抵抗する力は微塵もなく、むしろ喜んでいるようにすら聞こえる。

左手では胸への愛撫を続けながら、器用に右手でジッパーを降ろし、ショートパンツの中に手を差し入れていった。下着の上からではあったが、胸の先端よりも敏感な突起を簡単に探りあてることができた。

「あ、そこは」

座っている上、ショートパンツはエリカの体にぴったりだったので、指はそれ以上奥に入らない。

セリカは少しだけ考えて、エリカを立たせることにした。そのほうが色々邪魔されずに触れる。

「ほら、立って」

「え？」

「触れないでしょ？」

「触るって？」

「もちろん」

セリカはにんまりと笑っただけで、それ以上答えようとしなかった。

「立って」

もう一度繰り返す。

エリカはその言葉に反応しない。

セリカはエリカのシャツの中に差し入れた右手の、人差し指と親指で軽く硬くなった胸の先端に触れる。

「ううん」

エリカは過敏に反応する。

「感じたんではよ？」

「違う」

「違うなら、立ってよ」

「何でそうなるのよ」

「あんた」

善人からは程遠い笑みを顔に浮かべ、セリカはエリカの耳元にささやく。

「逆らえる立場なの？」

耳を軽く噛む。

胸をさする。

足の付け根に指を運わす。

「あひゃあん」

派手に體の含まれた声をあげて、一瞬、体が跳ねた。

「ね？」

熱い息を耳に吹き込みながら、セリカが笑う。

しかし、という動作でエリカは立ち上がった。

「じゃ、こっち」

軽く背中を押すと、よろよろと壁に向かってエリカは歩き出した。

「じゃあ、壁に手をついて」

エリカはもう抵抗するという顔もないようだ。ふらふらと手を伸ばして両手を壁に書いた。

もう立っているのも辛い。

そんな感じで、体重を手にもかける。

「ふふん」

セリカはその格好に満足して、一気にショートパンツを下着ごと引き下ろした。

「あ」

恥ずかしいところが外気に晒され、不安そうな声を上げた。

仲がいいとはいえ、友人。

明らかにやりすぎだ。

だが、激しくくすぐられたこともあって、少し興奮し、少し羞恥感になっていた。

自分も濡れている。

セリカも自覚していた。

この状況に、自分で確かめられないでも分かるくらい濡れていた。普段でもこんなに濡れない。

「足を上げて」

セリカはエリカのすぐ後ろにしゃがむと、エリカの右足に触れて言った。

エリカは一瞬だけ迷った。もう、引き返せないのだろうか。

無理だ。

諦めど、快楽への期待が温まって、エリカにはもう言うなりになるしかなかった。エリカが少しだけ右足を上げる。足に引っかかっていたショートパンツと下着を軽く引き抜いて左足の足首にまとめた。右足をそのまま外側に押し、足を広げさせる。足の幅が肩幅ほどに広がった。

その後ろにしゃがんでいるセリカには、すべてが良く見えた。

セリカは、エリカの内股に指で触れると、触るか触らないかぎりぎりのところをゆっくりと上に向かって這わせていった。

「あ、ああ」

エリカの太ももは、汗と付け根から垂れてくる液体で、いやらしく濡れて光っていた。垂れてくる液体の元に向かって、セリカの指は這って行く。

「ああ」

あまり濃くない毛の奥のうすい桃色の亀裂に指が触れた。開いていた亀裂を押すと、簡単にそれは開き、中に溜め込まれていた液体が、先を争うようにエリカの太ももを伝っていく。

セリカはゆっくりと入差し指を差し入れた。

「あ、あ、ゆ、び、あ」

エリカが体を揺るがさせながら、その指を受け入れる。

腰から頭まで、しびれるような感覚が突き抜けてくる。

「大洪水ね」

うれしそうにセリカが言う。

「そんな」

「そんな、何？」

「あ、だめ、あああ」

セリカは指で中をかき混ぜた。効果はてきめんだ。セリカの指に踊らされるようにエリカの腰が動いていた。

「何がだめのなの？」

いよいよセリカは調子付いていた。それだけではない。自分も興奮してきていた。

短いスカートをはいているのをいいことに、空いている左手で、自分のそこに触れていた。下着の上から、這っている縦一列の線をゆっくりとなぞっていた。

「あ、いいね、すこい」

適当なことをつぶやきながら、右手を熱しく、左手をゆっくりと動かしていく。

「あ、だめ、もう、もう」

その声を聞いて、セリカは自分のスカートの中に入っていた指をエリカのシャツで拭きながら立ち上がった。

「いいわ、いっちゃいなさい」

後ろから左手で抱きしめる。前に回した手は、そのまま胸に手を当てる。

「エリカったら、やらしいんだから」

「そんなあ、でも、でも」

「いいから」

セリカは入差し指だけでなく、中指までもをエリカの中に埋め込んだ。

「ああ、あああ、イク、イクう」

指を前後に動かし、

エリカの足ががくがくと震え、ひざが内側に折れた。そして、

エリカの体が硬直した。

「あ、あああ」

淫息を極限まで甘くした声が、エリカのどの奥から漏れた。

セリカは満足したようにエリカから指を抜いて、体を離した。

ゆっくりとエリカの体が融れて、その場に座り込み、壁に額を付けて動かなくなった。

「ふふうん」

セリカはエリカから離れると、部屋の反対側の壁にもたれるように座った。セリカも、あまり普通に歩きまわれる状態ではなかった。

この部屋にはテレビとゲームしか置いていなかった。折りたたみのテーブルもあるが、今は出してない。ポスターが張ってあるので、総風景とまではいかないが、女の子らしい部屋ではない。

足を捻げ出すように座ったセリカは、ちらっとエリカのほうを見てから、自分のスカートを揺り上げた。半分近くが濡れている下着が見えた。

「やだ」

火照って赤くなった顔をさらに赤くさせて、セリカは恥ずかしがった。

もう一度、エリカを見る。

エリカは肩で息を整えているだけで、こちらの様子に気づいていない。

「しちやお」

下着の上から押してみる。そくそくという甘い痺れが、背中を昇ってくる。

我慢できなくなると、セリカは下着の底を横にすらした。指をゆっくりと入れる。

体の中を波のように快楽がかけあがる。

「ああ」

左手で胸を揉む。

目を瞑って、背中を壁に押し付けた。

頭の中がもやに包まれたようになって、何も考えられなかった。夢中で手を動かす。

一番長い中指を付け根まで入れて、ゆっくりとこねた。

「ふあああん」

もう、とまらなかつた。

体が求めるまま、力いっぱい指を動かす。

「あ、あ、あ」

一気に高まっていく。

と。

腕をとられた。

「え？」

無理やり指を引き抜かれて、セリカは戸惑った。

目を開くと、目の前にいるのはエリカだった。いつのまにか復活していたのだ。

「指じゃ、物足りないでしょ？」

エリカは笑った。その手には、奥のものの形をしたおもちゃが握られていた。一度、丁寧にゴムだけが



ぶせてあった。

「じゃあ、お返しに」

前戯は必要なかった。十二分に濡れている。

何の躊躇もなく、エリカはセリカの中にそれを突き入れた。

「ひゃ、ああああ」

足の指の先まで力が入ってセリカは強く連した。

だが、エリカはそれで許すようなことはしなかった。

おもちゃから伸びているコードの先のスイッチを入れる。

低いモーターの駆動音。

男の形をしたそれが、ゆっくりとセリカの中でくねる。

「あああ、ひゃん、ああああ」

セリカの中にあるちよと真ん中くらいで折れている。角度にして三十度程度、それがセリカの中でゆ

っくりと向きを変える。

セリカにとっては、そのゆっくりな動きですら、自分の中で暴れているようにしか感じられなかった。

自分の中にある敏感で繊細な官能の線をひっかかれる。その線は頭の中につながっていて、快楽の中核

を直接刺激するようだ

全身が痙攣するほどの快楽が何度も何度も駆け上っていく。

「あああああ」

前兆もなく、絶頂を迎えていた。

「あら、まだ、弱なの」

スイッチのことを言っている、とセリカが気づいた時には、中をかき回す強さが変わっていた。

硬いものが動いていく。敏感な体内の壁がその動くのを阻止しようとするように絡みつく。それは無

駄な抵抗、というよりは、より自分の性感を高めているにすぎない。

低い駆動音に混ざって、水の音が聞こえてくる。

粘り気のある液体の音だ。

それがあふれてくる。

「あああ、そんな、強く、ためえ」

「それじゃ物足りないでしょ」

セリカの言葉を無視して、エリカはそのおもちゃの外に出ている部分を握りなおした。それをゆっくり

と出し入れる。

セリカの体が一度丸まって、次の瞬間、びんと伸びた。

見ると、足の指に力が入って丸まっている。本気で感じている。

「感じだしちやうって、いいわ、いかせてあげる」

大きな動きでおもちゃを動かした。

「あ、あああ、もう、ほんと、ためえ」

ねじれながら入りする硬いものの感触にただただ喘ぐしかなかった。

セリカは自分の体が今までにないほど敏感になっているのを感じていた。全身が性器にひっぱられるよ

うに、官能を感じやすくなっている。

「あ、あ、もう、いく、いっちゃうよお」

それを聞いて、エリカはより大きく、より強く、そして、よりいやらしくおもちゃを入りませた。

「いやらしい娘、いっちゃいなさい」

「ああ、はあん、いくろう」

体を硬直させた。

達したのだ。

「あああああああ」

さすがに息も苦しそうだったのを見かねてか、エリカはゆっくりと引き抜くと、ティッシュを何枚か重

ねて、セリカの体液で濡れたゴムを引き剥がした。そのままゴミ箱に捨てる。いくら興奮しているとはい

え、友人の体液を舐めるような真似はできなかった。

「まったくもう、セリカったら、やらしいんだから」

エリカは持っているおもちゃを、先生の持っている差し棒に見立てるようにして、左の手のひらを軽く

叩いて音を立てた。ゆっくりしたりリズムで歩くのにあわせて叩く。

「自分だって」

セリカは驚い息をそのままに、途切れ途切れに言う。

「そんなん持ってるなんて、よほどエッチじゃない」

的を射た指摘だ。

「これで二回はいいたわよね？」

「そんなの」

セリカは一瞬だけエリカの顔を見たが、瞬ち誇った視線を真っ向から受けて、赤くなってうつつむいた。

セリカの目には、少し、涙が浮いていた。

「そんなの入れられたら、誰だってなるわよ」

「なるわよ」

「それはセリカがやらしいからだって」

「じゃあ、エリカは入れられても平気なの？」

「もちろん」

単純に言葉の素り賣いだ。勇いだけで言ってしまったのだ。

興奮状態だったから、これで感じなければ正しい、という理論がエリカの中でまかり通ってしまったの

だ。

「じゃあ、入れて見せて」

エリカは即答できなかった。しかし、話の流れと勢いで、もう断れない状況になっていた。いや、本来

なら状況は許しただろう。だが、そんなことを考える余裕はなかった。

「いいわよ」

思わず答えてしまった。

こうして、二人はお互いどちらが変態であるかを、変態プレイによって競う仲になったのだ。

勝負はいつもくだらない(一)

次回、くだらないいつもの勝負、おたのしみに(二)



トラン

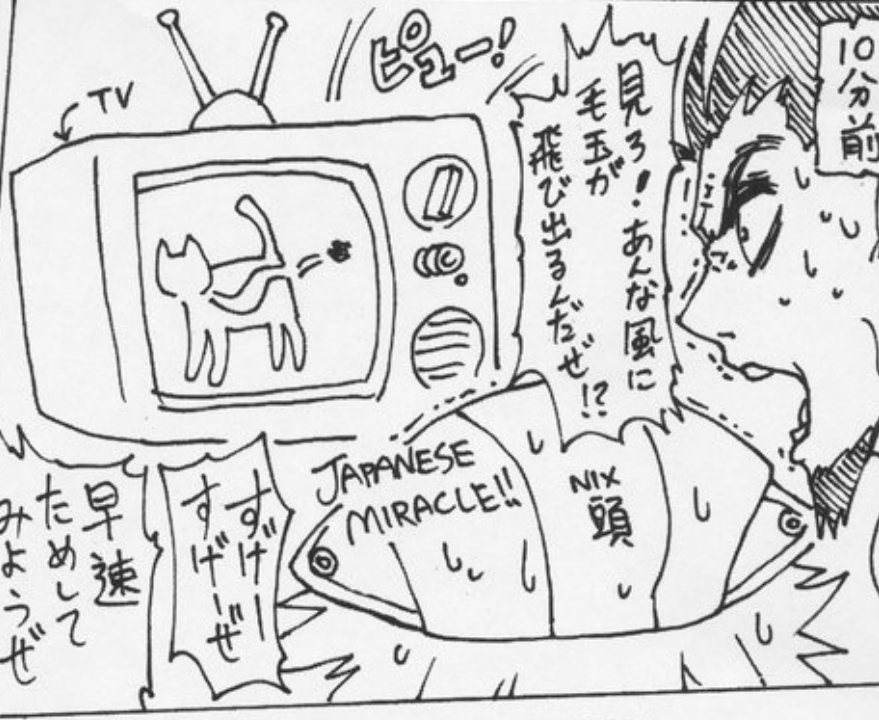


あつがきふゆかいまんが
**ニバカトリオの
 毛玉ケア**

おーこ元へえー



毛玉ケア〜で
 毛玉をはかなく
 なりました



というわけで

ビーマンIIのDMX本

いかがだったでしょうか？

今回はイベントの

当選通知から

しめ切りまでの期間が短く

いつもにも増して大変でした……

忙しい中描いて下さった

ゲストのみなさん

本誌当にありがとうございました！！

(ジルキ)

誰ア……

ヤッ……

ワッ……

ちなみに今回
入稿日が
ちようど
IIのDMXの
稼働日の翌日だったり
します。

新キャラの
女の子



この本が出る頃には
この新キャラの名前も
広まっているでしょうか。

とりあえず入稿が
終わったら

やりに行っ

てみようと思

っています。

ワッ……

ワッ……

END

メンバーコメント

★
猫
(みけ)
★

はーはーです。猫(みけ)です。
今回は超 怖かったです。(笑)...えはい)
もう後数時間で家出なくちゃいけないのにまた
ケコをたてました(死)
113113 本邦になんてかがんばってみたいんですけど、
またまたみけです(泣) もとがんばります。
何か今回のマニカは果のティンティンが失敗してて
気が入りません。直したい〜ティンティン〜!!
... おいません つかれて脳が変に... (元からです)

★ オノメシン ★

え〜どうも毎回同じようなマンガがすみません(汗)
いーかげんもうちょっとまともなモノ 描かねばと思うのですが
今回とか本っ当に時間無くて
描き方模索するどころか現状維持でいっぱいはいっぱいでした。
主線の強弱とかコマ割りとかもう少レガンバラんなあ...

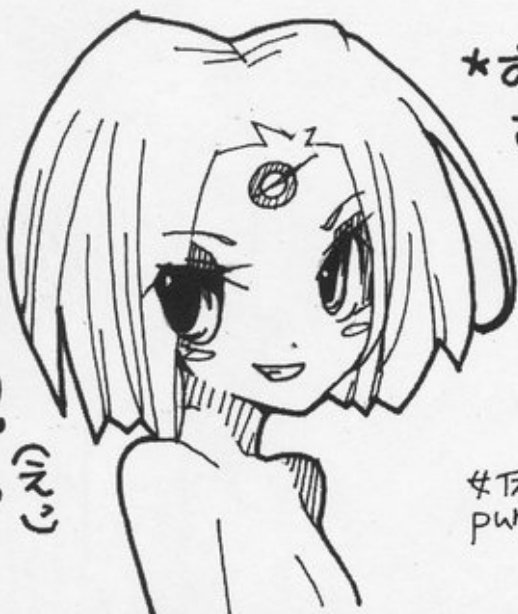
2002.9.28 オノメシン

★ OYZさんまたコメント忘れてるよ! ★
頼むよホント!(TOT)

ゲストコメント

★sumy さん★

コメント



*おまひび下さり
ありがとう
ございました!!*

私のガンナーは
ちぎって投げ捨てて
下さい...☆

☆体化ゲーム中 @ sumy,
puhisuke@hotmail.com

★七麻皐月 さん★

Q. コンシューマー版に入ってる「合体せよ! ストロングイェーガー!!」
のストロングイェーガーってこんなのですか?

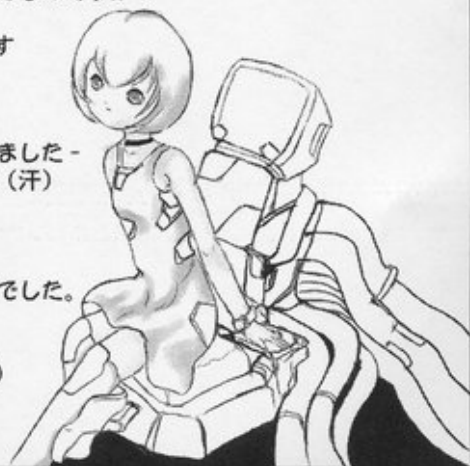
A. それはストロングザポーターです

スイマセン (^_^;;

今回もお誘い頂きありがとございました -
相変わらずぬちくない絵でスイマセ (汗)
でも楽しかったです -

7thの「Burning Heat!」は
矩形波倶楽部好きにとっては涙ものでした。

2002. Sep
七麻皐月 (tkya3@alles.or.jp)



★ 夕月さんからコメントを
もらい損ねてしまいました スミマセン ★

快感フレーズ KAIKAN PHRASE

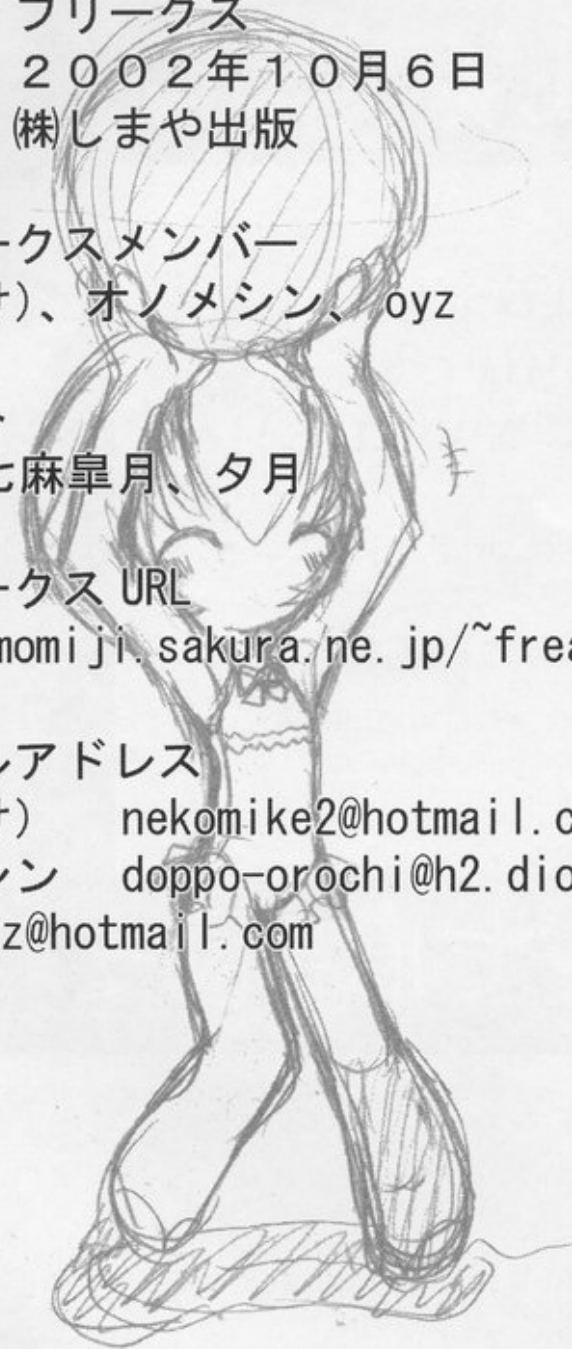
発行元 フリークス
発行日 2002年10月6日
印刷所 (株)しまや出版

♪フリークスメンバー
猫(みけ)、オノメシン、oyz

♪ゲスト
sumy、七麻皐月、夕月

♪フリークス URL
<http://momiji.sakura.ne.jp/~freaks/>

♪メールアドレス
猫(みけ) nekomike2@hotmail.com
オノメシン doppo-orochoi@h2.dion.ne.jp
oyz oyz@hotmail.com



本書は18歳未満の方には
ご購入いただけません。
無断転載、複写、複製、
Webへの掲載を禁止します。

for beatmania IIDX fans
adults only
presented by Freaks



快感フレーズ

KAIKAN PHRASE